

強靭でしなやかな



東京都市大学
工学部教授

長岡 裕

水道施設の再構築

水道施設の再構築

A black and white portrait of a man with dark hair and glasses, wearing a suit and tie. The image is grainy and appears to be from a newspaper or magazine.

浜銀総合研究所
地域経営研究室長

かが見入る前の前に、こんなセゾンセレショナルを見出しども、水道料金の値上げが報じられる日が近いうちに来る。会計制度を本格適用する。あるのだらうか。そんな場合の良いことが金見出しがある。ある中で、ある中者に笑付である。4月から新地方公営企業水道事業会計は、来年である。

財政會計

A black and white, high-contrast portrait of a woman. She has dark, wavy hair styled up. Her eyes are dark and expressive, looking directly at the camera. She has a neutral expression. She is wearing a dark, collared shirt. The background is plain and light-colored. The overall quality is that of a printed photograph from the early 20th century.

國立保健醫學研究所
生活環境研究部
上度主任研究官

浅見 真理

水質管理には大きく三つの種類があり、それぞれ課題が異なる。第一は、基準を十分下げる。原水が清浄な地下水である。しつかり記録を残すことが重要な水質管理、いわゆる水質検査である。最近の水質関係者は、しっかりされた処理状態で、は、水質管理は水質検査が中心というところも多いため、最近の水質関係者は、

性が求められ、告示改正、確で、おむね想定範囲水質検査の信頼性確保、内の水質変化による変動妥当性評価ガイドラインに対応する水質管理である。季節変動、天気による変動も多くなっており、表流水だけでなく、伏流水や地下水でもじの問題が生じる場合に適応するため、これま

水道関係者を待ち受けていたのは、関係機関、マスコミ、一般の方々からの質問の嵐であった。そ

の特定にまで至ったことは、大きな価値があると思う。過去の事故の中でも原因が同定された事例

新たな視点の計画論と革新技術

てまた経緯がある。
しかし、施設更新の機会は水道施設のさるもの強化の好機とも考えら
れる。必要なものではないだより
で給水する省エネルギー、
的、かつ震災時の停電に
も影響されない強靭なシ
ステムはどのような
か。
そもそも、理想的な水道システムはどのような
ものであります。これが人口増と水道
分な水源を確保できると
いうようなものであつ
る。これが人口増と水道
の困難な状況に対応
するためには、浄水処理、
管路技術、水資源計画、
制御技術などあらゆる水

新公営企業会計の適正な対応重要

重要な研究領域として開拓されなければならない。いふところだ、なぜ35億円もの埋蔵金が現れたのだろか。これは補助金等で取得した資産の減価償却の方法が変更されたことも埋蔵金が現れたのである。これが補助金等を財源として取得した資産の減価償却の方法が変更されたこと設置時ににおける資産の再取得の際には、新たな補助金等を得ることが原則としてできることを前提としてきたことが、業外収益・長期前受金戻入益として収益計算上位に算定される。この会計処理は過去に遡って再計算して決算書に反映す。は会計処理として生み出されたものであつて、目的は現金が増加したわけではなく、つまり35億円の取扱い決算方法によって現金は料金総額の引当金の計上による一般会計給付引当金との差額による一般会計の合理的な負担額も論点となる。

は、新会計移行後に起きることによる計算結果であると推測される事態に対するものである。この方法を採用してきました。これまでの水道事業会計では、補助金等で取得した資産であっても、施設として内部に留保する必要がある。こうした方法が今後は道事業者は、決算書上は認められなくなることとなるが、補助金等によって資本化する。これが新会計がもたらす新しい問題を実例として紹介したが、そのほか企業債

で行つてはいた試験の定量下限の再確認や書類の保存方法の見直しに加え、農薬や亜硝酸イオンなど新しい対応も必要となり、非常にじっくりされていると思う。

なかつた箇所での生物による変動を踏まえて処理条件を変へ、良質な水道水を確保するための水質管理である。最近では、豪雨による濁度上昇や温度上昇、これまで発生したことも多い。水質を反映して凝集剤や活性炭の注入量を制御するなど、水質担当者と淨水処理の担当者が、また、河川のホルムアーバニド前駆物質汚染等事態の解明にあたり、事務等の報告書にも詳しく述べてある。また、濃度変動が大きい農業類などで測定が年一回のみというと、ちょうど昨年5月に松江で行われていた水道研究発表会の途中から直後にかけ、利根川のホルムアーバニド前駆物質汚染

三つの力——正しく有効に柔軟に

性が求められ、告示改正、確で、おおむね想定範囲水質検査の信頼性確保、内の水質変化による変動妥当性評価ガイドラインに対応する水質管理であつて、流域水や地下水でもじこに適用するため、これま、季節変動、天気によ、な変動も多くなってお、心を行なう。季節変動、天気によ、り、表流水だけでなく、り、検査数の確保に連携するため、これま、季節変動、天気によ、うな問題が生じる場合思ふ。

水道関係者を待ち受けていたのは、関係機関、マスコミ、一般の方々からの質問の嵐であった。そ

の特定にまで至ったことは、大きな価値があると思う。過去の事故の中でも原因が同定された事例

れるのである。また、水需要の減少によって水道施設のスリム化が必要であれば、これまで実現が困難であった上流から清澄な原水を重力を利用して取水し、導水→淨水→送水→配水までポンプ動点を深刻に捉えるのだけではなく、水道システムの理想化のための好機であると認識することも、スームの構築も可能となるともいえる。再構築時代になって、水需要減少、料金収入減少などの問題ものかと考えれば、導水系にポンプ動力を使わず、淨水場においても長時間の処理で済む清澄な水を原水とし、かつ、地震などの自然災害後においても断水することなく継続して給水が可能であ

普及率の増加、都市への人口集中の水源の水質悪化と新たな水資源の確保の必要性などから、現在の高度な水道システムが構築されてきたといえよう。
現在のシステムは、こ
革新的技術が求められる

新たな視点の計画論と革新技術

てきた経緯がある。
しかし、施設更新の機会は水道施設のさらなる強制化の好機とも考らる。力が必要とせざる末端まで給水する省エネルギー的、かつ震災時の停電にも影響されない強制など、道筋システムのようなものが、人口増と水道需要の増加による水資源の逼迫を緩和するうえで、重要な役割を果すものと見てよい。